

第16回 今後の県立高校の在り方検討委員会 議事録

日 時 平成29年12月14日（木）

13:30～16:20

場 所 サンラポーむらくも彩雲の間

1 会長あいさつ

皆さん、こんにちは。もういぬ年の足音が聞こえてくる季節になりました。いよいよこの委員会も最終的な結論のまとめに入るところで、きょうは提言3まで含めてご審議をいただきます。

私たちの委員会では、2020年代の県立高校の将来像の検討が今年度に入ってから大きなテーマになってきたわけですが、そもそもは、平成31年度からの10年間の高校の在り方についてどうするかと問いかけられ始まった委員会であったと記憶しております。

いずれにしましても、これからの10年間は大きな教育上の変化を遂げていく10年間であろうかと思うときに、私どものこの提言にどのくらいの具体性を持たせ、どのくらいの抽象度とするのか、きょうの話題の一つだろうと思います。

10年後に誰かがこれを読んだときに、あまり的外れなことは書きたくない。10年後に読んでいただいたときに、やはり10年前にここで考えたことは今の状況にある程度当たっているところがあると、そう思っただけのような将来を見通した提言になるように努力したいと思います。皆さんのご協力をお願い申し上げまして、冒頭の挨拶にさせていただきます。どうぞよろしく願いいたします。

2 議事

[事務局より検討に当たったの修正箇所を説明]

<意見交換>

○委員

訂正があった2ページの検討の経過の上から5行目、「本検討委員会では、2020年代の」、それから、その段落最後に「2020年代の県立高校において」と書いてあるが、この検討委員会は当初は平成31年度から40年度までの提言を行う予定だったと思うが、ほぼ20年代と次期は重なっているが、その辺はこだわらなくても良いのか。

○肥後会長

提言のタイトル「2020年代の県立高校の将来像」にかかわるところだが、議論の出発点

として、現在の再編成基本計画が平成30年度で切れるので、その続きをどうするかという形で始まったことは間違いない。そのあたりをどのように受け止めるかだが、そういう出発ではあったが、議論の途中から共通認識してきたように、もう少し大きな視点で考えようという話になったことから、タイトルとしてはこれで良いのではないかと考えている。

〔事務局より提言1の修正箇所を説明〕

<意見交換>

○委員

2点。

「5. 県外や国外からも広く生徒を募集する」のところだが、実際に飯南高校の「森の学校サマーツアー」のように、既に行動している地域もあるので、その点を考慮して書いて頂ければありがたいと感じたことが1点目。

2点目は、「なお、県外生徒」のところを「なお、県外生徒の受け入れに当たっては、子供たちと地域の人たちとの交流も大切に、県内外出身にかかわらず、「地域の子供は地域で育てる」を実践するとともに」という表現にしてほしい。以前、PTA連合会で話をしたときに、保護者から、県外から来る生徒と地域とのかかわりが少なくて残念だという意見があったので、そのような趣旨の文言を加えて頂ければと思った。

○肥後会長

書き加えることの意味、趣旨を検討してみたい。

○委員

クラウドファンディングは良いと思うが、新しい言葉なので、注釈をつけるか、あるいは「不特定多数の人から資金調達ができるようなシステムであるクラウドファンディング」という表現にした方が良いと思う。

それと、6番目の島根らしい教育の魅力化を進めるというタイトルだが、書いてある中身は、環境整備とか寄宿舍などの受入体制の充実となっているので、「島根らしい教育の魅力化」という表現を使うとすれば、「島根らしい教育の魅力化のための環境整備を進める」としたほうが、この6つの構成の中の1つのタイトルとしてマッチしているのではないかと思う。

〔事務局より提言2（骨子）の修正箇所を説明〕

<意見交換>

○委員

高校入試の状況として、定員割れが続いている状況に触れることは、現状を認識する上で必要でないか。

○肥後会長

入試倍率が低いから主体性が出ないと受け取られる可能性があるので、削除すると提案したところである。

ただ、入試倍率が高いわけではない、その事実があるので、その部分を残すか残さないかという話だが、その辺りをどう考えるか。

○委員

検討の背景のところに事実として表現を入れたら良いのではないか。提言2のテーマとどうかかわるかについて議論をすると、誤解されるおそれがある。一方で、1倍を切っている状況は健全ではないと思うので、事実として捉えることは大事だと思う。今後の県立高校の在り方を考える上でも大事な要素でもあるので、検討の背景に事実として、生徒数が減っている一方、倍率はこうなっているという表現があっても良いと思う。

○肥後会長

どう解釈するか、その問題をどこに結びつけるかに関しては置くとして、事実として書いておく。その事実の出し方として、全県で出すのが良いのか、地域ごとに出すのが良いのか、なかなか難しい。

○委員

確かに、離島・中山間地域の問題があり、提言1にもあるように定員の問題と受け皿の問題は競争率の問題と分けて考えなければいけないと思うので、何をもって事実とするかという話はあるが、県全体としてマクロの部分での認識は必要だと思う。

例えば、平成29年度入試では、公立私立合わせて7,000人程度の定員がある。それに対して、県内中学校の卒業者数は6,500人を少し割っている状況なので、500人以上の空定員がある。これは捉え方もあるとは思いますが、私は異常な状況だと思う。もちろん地域によって事情が違うが、県全体でマクロ的に見た場合、県外募集の要素を入れるにしても、500人以上も定員が空いている状態は正常ではないと考えるべきではないかと思う。

○委員

私も健全ではないと思うし、議論すべき論点であると思う。議論の結果、総合的な判断

として1倍を切っても良いという判断もあり得ると思う。しかし、この状況が放置された結果だとしたら、議論して決めるべき、改善すべき論点の一つであると思う。それをどう考えるか、もちろん結論はいろいろあるし、総合的判断があると思うのでそれはそれで良いが、押さえておくべき論点として記述したほうが良いと感じている。

○委員

1のSSHと3のSGHはいずれも高度な学習という共通なくくりがある。語学か科学かの違いで2つに分けるのが良いのか、国際的な視野あるいは活躍する者を育成する学科ということで、一緒にくくるのが良いのか。3項目にしたほうがはっきりするのではないか。

○委員

(5)番の中高一貫教育校について、「現時点では島根県の実態になじまないと考えられる」と表現しているが、これは少し不親切な書き方ではないか、なぜなじまないのかについて詳しく書くべきだと思う。浜田市から要望書が出ているわけで、ここの部分はもう少し丁寧に書き加えるべきだと思う。

○委員

スポーツや芸術系に特化した系列については良いと思うが、総合学科高校のくくりの中にスポーツや芸術系に特化した系列と記述すると、大社高校はどうなるのか、その辺の整合性がとれなくなるのではないかと思う。

○肥後会長

中高一貫教育校について、浜田市で開催した地域公聴会の席でも市長から話があったことはもちろん記憶している。この扱いについてどうするかだが、現時点ではなじまないという根拠を少なくとも書かないと不親切だという指摘だが、皆さんはいかがか。

○委員

こういう表現になるほどの議論をした記憶はあまりなく、表現が気になる。

○肥後会長

会議の中では、現時点では無理だという議論はしていないと思う。

○委員

この委員会の提言としては、この表現ほどの結論は出していないと思うので、少し表現を変えたほうが良いと思う。

○委員

もう1点、慎重に研究すべきであるとあるが、私たちとしてはもう少し積極的に考えて

ほしい。岩手県でもやっているし、併設型と連携型は全く違う。

○委員

中等教育学校にいたっては全く性質が違うので、積極的に検討すべきくらいの表現があっても良いと思う。

○委員

中等教育学校や併設型の議論をきちんとしていけば積極的にと書けるが、積極的にと書くのには疑問がある。

○委員

中高一貫については、会議の中で、積極的に検討すべきという意見もあったし、慎重であるべきという意見もあった。しかし、詰めきった議論にはなっていなかったと思う。

○委員

中高一貫については非常に難しいと思う。私も保護者として、中高一貫の良さは身にしみて感じているが、市部のようなあらゆる選択肢がある中での中高一貫であれば良いが、選択肢をなくしてしまう、ここに併設型中高一貫校しかないような学校づくりには疑問に思うところがあるので、そういった意味で、慎重にと書いているのは良いと思った。

○委員

この委員会の意見としては、積極的または慎重にと書けるほどの結論には至っていないと思うので、主観的な表現は避けたほうが良いのではないか。

○肥後会長

多くの意見はこの場で検討した事実に基づいて書くべきだという意見だったと思うので、お預けいただき、反映させたいと思う。

○委員

学びのセーフティネットのところにもスマッチという言葉を使っているが、この用語は適当か。高校や大学で一般的に使う用語であれば良いが、中学校の認識では使わない。言い換えの用語が浮かばないが、ここでは、自分の認識と実態がずれていたというニュアンスであると思う。他の用語での言い換えが良いと思うが、そのあたりは高校ではどうか。

○委員

4番のインクルーシブ教育のところに通級指導という言葉があるが、これは通常の学級にいながらにして指導を受けるという意味で良いか。通級指導の解説が必要ではないか。

○肥後会長

島根県では、邇摩高校と松江農林高校で進められている。今後、通級指導担当の先生の

研修が必要になるし、大学でも、通常の授業や学校生活の中でサポートシステムをつくっていくことが必要になる。通級指導に注釈をつけたいと思う。

○委員

ICTのところ、「生徒1人につき1台のタブレット端末などを用いた授業」とあるが、そこまで具体的に書く必要があるか。無理にここまで書く必要はないと思う。

○肥後会長

ここで言いたいことは、ICTを活用して、主体的な授業参加を促し、創造的な発想が出てくるような授業展開を促進するためのツールとして使いこなせるようにする、これからの時代に対応できる力を高校教育でもつけていくというのが主眼なので、そのことがわかるような表現にする。

○委員

ICT教育を進めるには、教員の研修も必要だが、ハード整備がともなっていないといけないと思う。研修しても現場で使えないと、ICTを使った授業改善は進まない。

○委員

情報リテラシーとかメディアリテラシーといった正しく情報を扱う部分も大切なので、詳細に書く必要はないが、そういった部分も教員研修の中に入れる必要があると思う。

○委員

選抜方法の工夫についてだが、選抜方法における学校の裁量権を広げる必要があることを書き加える必要があると思う。教育課程の魅力化も大切であるが、学校を魅力化し、求める生徒像を明確にするためには、前提として、選抜方法も工夫しないと魅力化は進まない。

○肥後会長

現在も内申書と高校入試の割合について、各学校の裁量があるという話が以前あったが、ここではもう一步踏み込んでいて、試験の在り方や内容を工夫することで、こういう人材育成をしたい、こういう生徒に来てほしい、それに合った試験をするという独自性を持たせる表現にしている。

〔提言3について会長より説明〕

<意見交換>

○委員

市部というのは、例えば松江市にある高校で、町村部というのは、町村にある高校とい

う認識で良いか。

○肥後会長

基本的にそう書いている。ただ、市部にもさまざまなトーンがあることは間違いない。松江市については（3）松江市内通学区で取り上げているが、松江市以外の市も含んで言っている。

○委員

例えば安来市はどう考えれば良いか。

○肥後会長

基本的には、市立、私立の高校の配置状況であったり、交通の利便性があったりということを書いているので、イメージとしてはかなり限られる。ただ、安来市はここに入ると思う。

○委員

市町村合併で、例えば雲南市ができたが、大東高校や三刀屋高校も市部の高校と定義するのか。

○肥後会長

この定義ではそうなる。「一定の生徒数や学校規模が必要である」、「1 学年 4 学級以上 8 学級以内が適当」という基準を既に下回っている高校もたくさんあるではないかということか。

○委員

そうである。例えば、「市部の高校は、公共交通機関の利便性が高く」と書いてあるが、松江市や出雲市は当てはまると思うが、例えば雲南市の利便性はどうなのか、浜田市、益田市はどうか、線引きは難しいと思うが、その辺はぼかした形で議論を進めていくということか。

○肥後会長

そのあたりは意見を聞きたい。

○委員

それぞれの市町村で、うちはどちらの分類なのかといった議論をすることは不毛だと思うので、書き方をどうするかは別として、例えば市部とはどこを指す、町村部とはどこを指すのかを明確にし、読んだ人が困らないようにすることが大切だと思う。

○委員

望ましい学校規模である 1 学年 4 学級以上 8 学級以内の基準を全ての市にあてはめて考

えるのか。

○肥後会長

この基準をあてはめると困る市もあるかもしれない。これまでデータを確認してきたので、どの地域にどれくらいの規模の学校が何校あって、今後の中学校卒業生数の推移についてはこうなるといったイメージをもっているはずである。一応、今、市部、町村部という大きな分け方をして、町村部については、卒業生数は減るが、覚悟をもって高校が不可欠だという認識のもと、県と地元でしっかり存続させていこうと書いている。

○委員

市立や私立の高校の配置状況や交通の利便性なども考慮しながらと書いてあるが、学校の配置状況を見ると、市立の学校は松江市にしかなく、私立があるのは松江市、出雲市、江津市、益田市であり、市部とは大体そういうところを指すと思っている。「標準法」には、都道府県はその区域内の私立の高等学校並びに公立及び私立の中等教育学校の配置状況を十分に配慮しなければならないとあり、私は市立や私立が配置されているところを市部とするのがわかりやすいと考えている。

○肥後会長

私はこれまで、具体の地域名を上げた議論にしたほうが良いのではないかとやってきたが、この会議の中では地域ごとの議論は最後までできなかった。具体の議論をした地域だけを取り上げて書いた形になっている。だから、それ以外の地域については、総論的な書き方となった。市部と書いてもどこの話なのかとなるので、もう少し書いたほうが良いとの意見があったが、そこはきちんと書くべきか。

○委員

要は定義論争が起こらない形が良い。

○肥後会長

江津市、浜田市の話は後段で出てくるが、安来市、雲南市、大田市が市部では触れられていない。

○委員

議論を踏まえて考えると、確かに松江とか浜田、江津は議論したので、それはそれで書く、それ以外の市については、市部というよりは町村部の議論にあてはめるのが良いのではないかと思う。

以前も申し上げたが、県立高校といえども、地元の市町村、自治体がもっと主体的に関わりをもったほうが良いと思っている。提言1の考え方を魅力化高校のみにとどまらず、

この市部と言われる高校においても取り入れ、自治体が主体的に関わり、県教育委員会と連携しながら、地元の小学校、中学校も含めて教育の在り方を考えてほしい。

私は県立高校の大きな課題の一つとして、誰が経営・運営するのか、責任論が難しいと思っている。校長も先生も生徒もみんなかわってしまう中で、高校をどうしていくべきかを考える一つの主体として、市町村、自治体はプレーヤーとして外せないと思う。その考えが抜けているので、県内どこの高校もそういうビジョンを県教委と一緒に描いてほしい、そのほうが良い高校づくりにつながるのではないかと私は思っているので、そのことを明確に入れてほしい。

○委員

少し話をぶり返すが、提言1の内容には、松江とか出雲の高校には該当しないものが多々含まれている。県全体の話として提言して良いのか、最終的に提言3の具体の記述に関係してくるのではないかと思う。ただ、我々が議論していない地域もあるので、その書き方については難しいところがある。

4学級以上8学級以内については、これで良いと思うが、1学級定員が40人で良いのかが気になる。議論の中で、どれくらい教育学的に良いのかという投げかけがあったので30から35人と答えた記憶があるが、1クラス40人で良いのか。少人数指導がこれからますますクローズアップされる中、文科省は40人と言っているが、もうすこし少なく設定する、現に1クラス30人で学級編成している学校もあるので、そのあたりのことに触れなくて良いのかが少し気になる。

○委員

松江市の通学区の課題に対する回答として、通学区の廃止とあるが、3校存続の妥当性についても課題があるのではないかと。例えば、他の市と比べて松江市の普通科の定員は緩いという気がしている。3校存続に関わる議論はしていないが、現実的な課題としてはあると思う。10年後、どうなっているかを考えたときに、通学区の廃止だけで、現状が変わるかについては少し疑問に思うところがある。

○肥後会長

書き方がすごく難しく、通学区を設定することによって、3校の存続を保障してきたという側面がある。ただ、そういった状況にはないのではないかと考えたときに、こういった課題があるので、3校存続が妥当かどうかという書き方はしなかった。通学区をまずはなくすという意味で書いていて、校数に限った議論をしてきたわけではないので、3校が良いか2校が良いかとかいう書き方にはしていない。

○委員

等質等量という言葉が使われているが、本当にそういう概念で学校が設立されたのか。南北に分かれるときにはそうであったと聞いているが、東高の設立時には、東高と南北2校が等質等量という概念はなかったと私は聞いている。

○肥後会長

これまでの議論の中で等質等量の考えで校区を設定してやってきたという説明があったが、松江市3校が校区を決めている背景にはこういう考え方が基本的にあると私は受け取っている。

○委員

10年前の答申作成時に、松江3校の校長のヒアリングを行ったが、当時、東高の校長が北、南と等質等量で頑張っているという話をされた。平成18年の答申のときにも、基本的には等質等量という考え方があった。

○委員

いろいろな解釈があると思うが、これまでの委員会、前委員会の表現を踏まえて考えるしかないと思う。

○委員

私はちょうど東高1期世代だが、当時学校では、北高、南高、東高は等質等量であると話していたのを記憶している。等質等量という表現は気にはなるが、実際そうだったと思いながら読んだ。

あと、3校存続の妥当性について書かれた部分について、私はこの書き方のままでも良いと思うし、保護者の立場としては、違和感なく読めた。

○肥後会長

3校がどういう意味でつくられてきたかという経緯に簡単に触れながら、子供の数が今後ふえていくという話ではないので、そういった観点から、通学区は少なくとも外して、自由に自分の行きたい高校が選べ、そこには市立もあれば私立もあり、それぞれの特色のある高校教育をすることによって、その選択肢を公平にふやすという話にしたほうが良い。3校が今後必要であるかといった話はやめ、通学区を外す話だけで書くことにする。

○委員

基本的にそれで良いと思うが、中学校の卒業者が減少する中という表現だが、東高ができたときは生徒が増加するときで、普通科が南北で足りないから東ができた。それが、今度は少子化で子供が減り、東高ができたときよりも中学校の卒業生数は減っているので、

そういうスパンで見た場合、中学校の卒業者が減少している中という表現は事実と全く反していないと思う。

○委員

パブリックコメントを求めるときには、例えば、教育魅力化推進事業の対象校は具体的にどこなのか、県外募集と必ずしもイコールではないと聞いているので、脚注があった方がわかりやすい。

○委員

浜田市、江津市の県立高校の方向性の中に、中学校卒業生数は、県西部の中で一番多いにもかかわらずと書いてあるが、江津、浜田は一つの地域として考えるのか、確認したい。

○肥後会長

この委員会全体の議論としては、別の地域と考えるよりは、高校の設置上は一体として考えたほうが良いという結論だったので、そのことを踏まえて書いている。江津と浜田では状況が違うが、江津では、浜田ではと書いても仕方がないので、一体的に考えたほうが良いとの委員会の結論だったので、一体的に見ている。

○委員

解釈の問題だが、厳密に解釈できるほうが良いのか、曖昧なままが良いのかわからないが、16ページにア、イと書いてあるが、アの学校とイの学校の2校に集約するとも読めるが、その辺はどう考えるか。

○肥後会長

提言1、提言2や市部における高校の在り方の観点を受けて、アとイを読んだらどうなるかという面倒くさい論理立てになっている。この委員会で、江津高校は浜田高校から分かれてできているので、今後、江津に置く必要があるのかなのかという議論をしたわけではなく、また、江津工業、浜田商業、浜田水産を全部まとめて一つにしたほうが良いという議論をしたわけでもない。ただ、それぞれの専門高校の特色を生かしながら共通に学べる場もあっても良いのではないかと、アントレプレナーシップを養成できるコースもあったほうが良いのではないかとといった議論はしてきた。そういう流れの中でこの表現になっている。

○委員

アは普通科高校に関することだと思うが、拠点校と書いてあり、一点集中主義みたいに見える、見える。しかも、そのような高校を浜田、江津地域につくる必要があるのか疑問である。普通の普通科高校、地域創生にかかわるような、探求的な学習を進める普通科

高校と書いてあれば、ふんふんとうなずけるが、ここまで先進的な高校の設置がこの地域に普通科高校として1校あるべきだと読めるので、そこは工夫していただきたい。

○肥後会長

アの書きぶりは難しい。拠点高校というのは1校ではないかと読む人もいると思うし、2つの拠点高校はないと思う。

これまでの議論は1校とか2校とか言わずに、石見地域を一体的に考えて、普通科高校の在り方について考えたほうが良いという緩い議論しかしていないので、1校とか2校とかは書かなかった。もし統合を考えるのだったら、西部の拠点となるような高校を1つ置くような勢いで考えないと、単なる縮小ということにしかならない。

○委員

こういう高校が石見になくて良いということではないと思うし、議論の中でも、普通の普通科高校というのは難しいし、単なる縮小があるべき姿なのかという議論はあったと思う。書きぶりはあるかとは思いますが、石見というエリア全体で考えたほうが良いと思う。

あと、その後の「なお」のところだが、ここで書くべきは、資源の有効活用よりは生徒、保護者の負担軽減だと思っているので、もちろん効率性や望ましい規模という観点からのある程度の学校の変更はあったとしても、通学とかの負担によって選択肢を減らすべきではない。ここでは通学や寄宿舎の整備など、生徒の負担が余りふえ過ぎない、選択肢を奪わないようにすることについて力点をおいて書いていただきたい。

○肥後会長

効率的な資源の活用ということよりは生徒の負担軽減ということを表に出して書くべきだというのは、全くそのとおりだと思う。

本当は2つ選択肢があって、2校の普通科高校それぞれが存続するのであれば、それぞれが存続するだけの根拠や地域にとってのメリットなどを十分に評価する必要がある。そのことによる教育効果や意義あるいは地元の支持とかそういったものがもし得られないのであれば、どちらかに統合する。ただし、統合した際の中身は、選択肢を広くしたり充実させたりする必要があり、生徒の負担軽減を図る必要がある。選択肢としては、このまま存続、そのときにはこんな課題がある、そうしない場合にはこうするほうが良いという書き方になる。両方を書くか、それとも片方だけにするか。

○委員

江津高校だが、スケールが小さいから統合するのであれば、魅力化校の概念とは合致しない。江津市がどういうスタンスでいるかはわからないが、本気でうちもやりますという

ことになれば、魅力化校と同じような形の学校にすることは可能だと思う。

○肥後会長

そういうことである。私が言った前半の選択肢はそれである。そういう方向があり得るので、だから、1校にしましょうという提言はしないということになる。

○委員

考える選択肢を広げる表記のほうが良い。廃校というか、その危機ばかりを書くのではなく、課題を上げて、頑張れるような表記にすると、良い影響を与えることができるのではないかと思う。

○肥後会長

それでは、そのような方向で、両論併記というわけではないが、現状を維持するのであればこういう条件が必要、それができないのであれば、こういう形での統合を考えるといった書き方にしたほうが良いか。

○委員

統合ありきではなく、むしろ魅力化校と同じような扱いをすべきと書いたほうが良いと思う。

○委員

提言1、提言2及び市部における高校の在り方の観点からと書いてあるが、今の江津市を市部で捉えるのは無理があるのではないか。江津高校は、魅力化校の位置づけで考える、可能性として、選択肢の一つとして残しておいても良いのではないかという気がする。

○肥後会長

私が危惧するのは、高校を潰したくなかったら、教育魅力化推進事業に参加すれば良いということにならないかということ。本当の意味で魅力化を進めていく可能性や必要性はあるが、誰がそれを評価するのか。手を挙げれば、予算がついて、そうなれば残れるという変な議論になっていくような感じもして、そこが少し疑問である。

○委員

ここでの議論も、魅力化には意味がある、価値があるという意見はあったと思うが、存続することに意味がある、価値があるという議論ではなかったと思う。そこをどう切り離して考えるか。そういう意味で、町村部の高校は存続すべきとも読めるが、自治体が主体的にかかわるべきだと言っている以上、自分のところには要らないという選択もあるかもしれないので、そこはもう少しフラットでも良いのではないかと思う。魅力化の意義は議論してきたと思うが、高校存続が常にベストの答えであるという議論はしていないと思う。

○委員

私の勝手なイメージだが、普通科高校と専門高校を一緒の学校にくくり、新たな学科を設けるやり方もあると思う。例えば、地域創生デザイン学科とか。

○委員

「各学校においても、今までやってきたことをやめられない組織文化や学校や教員が全てを抱え込もうとする意識を改め、業務を見直すとともに」と書いてあるが、現場の教員が見て、なるほどと同意される人も中にはいるかもしれないが、そうでない教員もたくさんいるように感じる。少し踏み込みすぎているような気がする。

○委員

多忙感の要因の中で、分掌に係る業務や資料云々とあるが、部活動のこともあると思う。

○肥後会長

部活動の話題は出たが、多忙感があるとともに充実感もあるといった議論になったので、あえて触れていない。

部活動、子供の安全に関する責任を負うことでもあり、かなり大きな負担感は当然ながら伴うので、充実感がありながらも負担感は大きいであろうから、部活動の問題も触れるようにしたい。

○委員

この年次進行計画、ロードマップは、どんなイメージか。

○肥後会長

基本的には、何年度にどういう成果に着地するかということをおおまかじめ計画として立てなければいけない。もちろん事業内容によって長かったり短かったりするが、いずれにしても、具体的に何年度までに何を実現するかを書かなければロードマップにならない。そこに向かって、何年度はこうする、何年度にその進捗を検証し、事業計画の修正を図るといったような、具体化していくための方策を立ててくださいをお願いしている。

○委員

現在の再編成基本計画よりも、より具体的なものをつくってほしいという理解で良いか。

○肥後会長

ここに示したのは、必ずしも具体的なものばかりではない。例えば、各高校で独自の入試ができる体制を開発しなさいと書いているが、いつまでにそれを開発するか、いつごろから実施するのか、入試にかかわることはとりわけ、設計が大事で、いつごろから行われるのかを県民に示さないといけない。そういった具体の計画が立てられるところについて

は、具体化してほしいとお願いしている。

○委員

よくわかるが、今の再編成基本計画は漠然としたものであり、ロードマップにはなっていない。その説明としては、世の中の変化が大きいから、計画どおりにいかなかったり、新たなことも出てくるので、1年1年、現状を見ながら見据えていくという計画になっている。今回の提言では、魅力化事業、特に離島・中山間地域の話が中心になっているように見えるが、それは、現行の再編成基本計画にはなかった要素である。端緒となった隠岐島前の動きが、再編成計画に盾突き、現在の取り組みにつながったわけだが、それが受け入れられたのは、ロードマップがはっきりしていなかったから、漠然としていたから、新しいものが打ち出せたのだと思う。この提言にはかなりいろいろなことが盛り込まれているが、どういうスタンスでいくべきか、ロードマップをきちんと作成したほうが良いと提言するのか確認したい。

○肥後会長

新しい提案がかなり多いので、それを具体化する方策を立ててほしいとお願いしている。それから、教育魅力化推進事業あるいはしまね留学などさまざまな取組があるが、それについても、評価なしでやるわけにはいなくて、どのくらいの年限でそれを評価していくかということはずごく大切だと思う。取り組みやすさ、にくさ、それから、さまざまな環境や条件の違い、意識の違いが反映されて、同じ事業に見えても、さまざまな濃淡がある。成果が上がらないからやめてくださいという話ではなくて、なぜ上がらないのか、上がらない課題が何で、それをどう変えていくのかということをやらなければいけないので、PDCAを回してくださいという書き方になっている。

もちろん、新しく計画外から起きる事象について、それは取り上げないとは書いていないので、それはそれとしてあり得るかと思う。

3 閉会あいさつ（片寄教育監）

委員の皆様方には少し時間を超過してのご議論、まことにありがとうございました。それから、肥後会長におかれましては、本日お示しいただきました提言案のまとめ、大変お忙しい中、取りまとめていただいたことにまずもって感謝申し上げます。重ねて、委員の皆様方から、また積極的なご意見を頂戴いたしましたこと、ありがとうございました。

先ほどのやりとりでございましたように、またパブコメ前の最終的な意見集約に、委員の皆様方にもご協力いただけたらと思っております。

我々といたしましては、「おわりに」の下から2段落目の表現、非常に責任の重さを感じているところでございます。最後のところでも出ましたが、ロードマップをどのようにまとめるか、この提言が最終的にまとまり、受け取った後の我々の大変重い仕事だと思っております。

年の瀬も近づきます。皆様方、気ぜわしい日々をこれからお過ごしと思いますが、どうぞご自愛いただきまして、また引き続きのご協力をお願いしたいと思います。

なお、2月22日（竹島の日）は、当日の警備状況の問題がありますので、詳細がわかりましたら、事務局からご案内させていただきますので、よろしく願いいたします。本日はどうもありがとうございました。